「平和の神はあなたがたと共におられます」

フィリピの信徒への手紙２章１－１１節

森島　牧人　牧師

今日与えられたパウロのフィリピの信徒へ宛てた手紙の中には、教会の大切なこととして私たちが学んで来た主イエスの出来事、すなわち十字架の死・復活（イースター）・聖霊降臨（ペンテコステ）という三つのことの意味が語られています。

「わたしにとって、生きるとはキリストを生きること」というパウロの言葉が小見出しとなっている段落に続く今日の聖書箇所をよく読むと、復活の主の言われたマタイ福音書の終わりの御言葉「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」がその内容であることが分かります。つまり、＜イエス・キリストが共にいてくださる＞という深い信仰を持ち、喜びと平安の中に生きて行くのがキリスト者のあり方であると言っているのです。

この手紙は、厳しい迫害の中にあって右往左往するフィリピの信徒や教会に宛てたもので、パウロはその中で、苦しみ混乱する信徒たちにキリスト者のあり方を改めて教え、彼らの前にキリストの生き方のイメージを描き出しています。それが２：６以下の「キリストの讃歌」と呼ばれるところで、それは二つの部分から成り立っています。

「キリストは神の身分でありながら」と始まる前半は、神の御子としての権限をかなぐり捨て、人間としての尊厳さえも放棄して神に服従された＜義人＞の貧しさの有り様が描かれています。エレミヤ書５：１に「エルサレムの通りを巡り　よく見て、悟るがよい。広場で尋ねてみよ、ひとりでもいるか　正義を行い、真実を求める者が。いれば、わたしはエルサレムを赦そう。」との神の言葉がありますが、パウロが描き出したのは、人間の救いのために＜命を捨ててでも神のこの言葉に対応しようとされた＞主イエスの人間への愛そのものでした。それゆえにこの部分は「キリストの讃歌」と呼ばれる事となったのです。

キリストの讃歌の後半、それはキリストの従順に対する神の報いで、「神はキリストを高く上げ」と始まっています。この「高く上げ」を復活のことではないとする聖書学者がいますが、初代教会の信仰などを読むと、信仰告白である使徒信条の中の「三日目に死人のうちからよみがえり、・・・全能の父である神の右に座しておられます。」に於いてもそうであるように、十字架の死に至るまで低くなられたキリストを＜神が天にまで上げられた＞ということは、「死人のうちからよみがえり」というキリストの復活を意味しているに違いなく、「高く上げ」の意味自体が神だけが持っている世界を支配する権能を十字架で死なれたキリスト・イエスに与えたということを示しているに外ならないと思われるのです。ある神学者は「キリストが自分を捨てた時、神がキリストを高く上げた」と言われましたが、実にこの復活という出来事は神の御業であり、世界の歴史の中で起こった人類と世界の救いの決定的な出来事以外の何ものでもないのです

２：１０，１１に、全宇宙がイエスの聖名の前にひざまずき、「イエス・キリストは主である」と公に宣べるとありますが、今世界中の教会で行われている主日礼拝では「イエス・キリストは世界の主である」という告白が鳴り響いています。主が復活された日である日曜日、すなわち主の復活を基点として礼拝を守っているキリスト教会は、礼拝の度に復活信仰を確認しているのです。礼拝は遠い昔の奇跡物語を大事に抱えて行っていると誤解されることもあるのですが、礼拝はそのような後ろ向きのものではなく、福音が、罪と死の支配の中にある現実の世界と人類を救うために、神が我々の歴史の中に始められたものであることを共に承認してこの福音の真実に固く立つ、これが主日礼拝の意味です。それは同時に希望の福音を受け入れてそこに参加する我々自身・教会自身が変えられて行くということです。バプテスマによって罪の体が死んで新しい命の中を生きる者に変えられた各々がその新しい命に望みを持って生きて行く、それが教会の存在の意味です。

神の人間への愛ゆえにその身を低くされたイエス・キリスト。その主御自身の御手がバプテスマを通して、我々人間のいる絶望の淵に、地獄のような場所に届いているのです。ヨハネ１４：１８に「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。」とのキリストの言葉があります。その御言葉通り、どのような状況にあっても、キリストが神の御手によって墓から高く上げられ、勝利と希望の命に引き上げられたと同じ希望が、我々にも与えられているのです。キリストがよみがえられたことを信じる復活信仰は、死から新しい命に入れられる約束を我々にもいただいている、つまり我々もよみがえるということを宣言するものなのです。私たちは今日、もう一度そのことを心に留めたいと思います。

（説教要約　羽入田悦子）